

(川内市湯島町2974-3番地)

位置と環境

御釣場古墳は、川内川の右岸側にあり、川内川沿いを通る県道京泊・大小路線の御釣場バス停から40m下った標高約10mの丘陵の先端に位置している。同古墳の眼下には、川内川を見下ろし、京泊からは約5km上流に所在する。

御釣場の地名は、藩政時代藩主の釣り場であったことから命名された場所である。

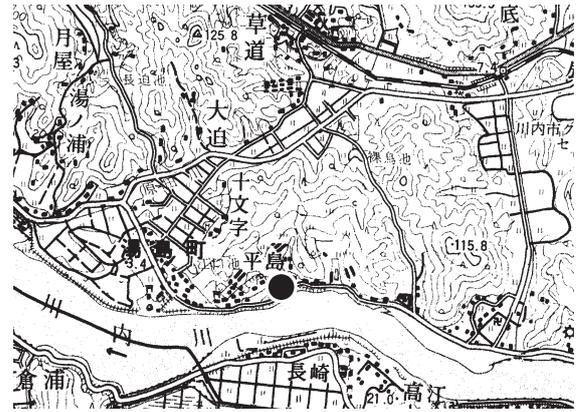
調査の経緯

川内市教育委員会は、昭和63年(1988)から3か年計画で、市内全域を対象に埋蔵文化財の分布調査を基本とする「文化財基礎調査」を実施した。

最終年度の平成2年(1990)は、川内川右岸の通称「川北」地区を主に調査した。その際、港町方面に向かう途中、御釣場古墳の隣接地の道路が新たに拡幅されていたため、一帯の踏査を実施した。

踏査の結果、丘陵地の一部が造成されており、造成地の南西側の法面に板石状の一部が露出しているのを発見した。

同地は、昭和10年(1935)に道路工事の際に箱式石棺墓が発見された経緯があったために確認調査を実施した。



第1図 御釣場古墳の位置

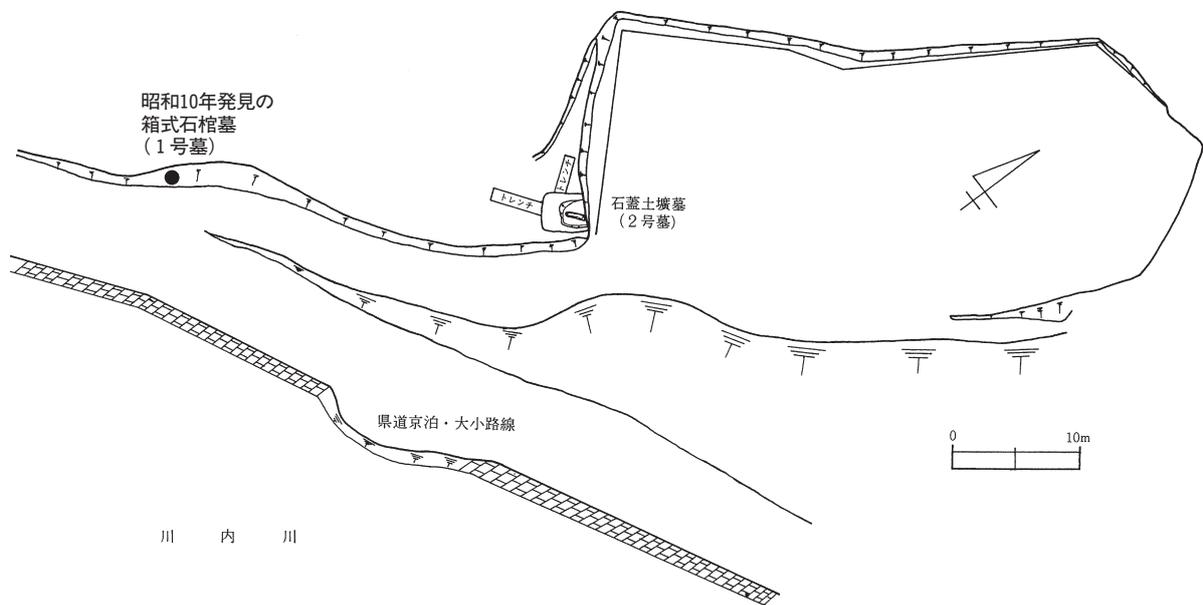
その結果、深さ60cmのところには170cm×80cmの範囲で蓋石と思われる遺構の一部を確認したため、発掘調査を実施した。

遺構と遺物

同古墳の調査は、表土層を剥いだ時点で墓壙を検出した。掘り方プランの長軸は、北東から南西にかけてみられ、短軸は北西から南東にかけているのが確認でき、蓋石の位置も同方向にみられた。その結果、石蓋土壙墓であることを確認した。

石蓋土壙墓は、二段掘り込みの構造で、規模は184cm×135cmの墓壙のほぼ中央部に165cm×45cm、深さ30cmの土壙を掘り込んでいた。また、この土壙上には、板状の蓋石5枚が置かれていた。

蓋石は、最大のもので100cm×56cm、厚さ9cmで



第2図 御釣場古墳の地形図

最小のもので60cm×25cm、厚さ7cmを測る。

墓壇の北東側は、掘削により削平され、床面は南西側がやや広く造られており、南西側から北東側にかけては約4度の傾斜を使っており、南西側が頭位方向と考えられる。

また、南西側から3枚目の蓋石は、南西側が厚く、北西側が薄い石を使用しており、蓋石のレベルを整えるための調整石を北西側に置いてあり、主軸方位はS-33°-Wであった。

墓壇及び土壇内には、人骨や遺物は発見されなかった。また、石蓋土壇墓の南西側及び北西側においても周溝等は、確認されなかった。

石蓋土壇墓周辺の地層は、基盤が溶結凝灰岩であり、上層では赤褐色粘質土や褐色粘質土であった。

また、一部には溶結凝灰岩の風化土なども見られ、これらの地層には転石も含まれていた。そのため、石蓋土壇墓が造営された場所は、地層的に一番やわらかい所を選んだ可能性が考えられる。

特徴

県内で初例となる石蓋土壇墓は、川内川流域の墓制を知る上で、新たな資料を提供してくれた。

もともと川内川流域には、地下式板石積石室墓及び古墳の分布は見られたが、石蓋土壇墓の存在は知られていなかった。

石蓋土壇墓の構造的な面から見て、土壇の掘り方やその上に置かれた蓋石のレベルを調整する為に置かれた調整石などからしても、かなりの技術を要していることが知られる。

御釣場古墳の石蓋土壇墓は、二段掘り込みをなした構造であるが、一段掘り込みの石蓋土壇墓が共伴する北部九州との関係は、今後の類例の発見を待たなければならない。しかし、北部九州で知られる箱式石棺墓と石蓋土壇墓が同一地域に共供していることは、御釣場古墳でも言える。

時期は、出土遺物がないためはっきりしないが、北部九州での検出例からみて古墳時代初頭に位置付けられると考えられる。

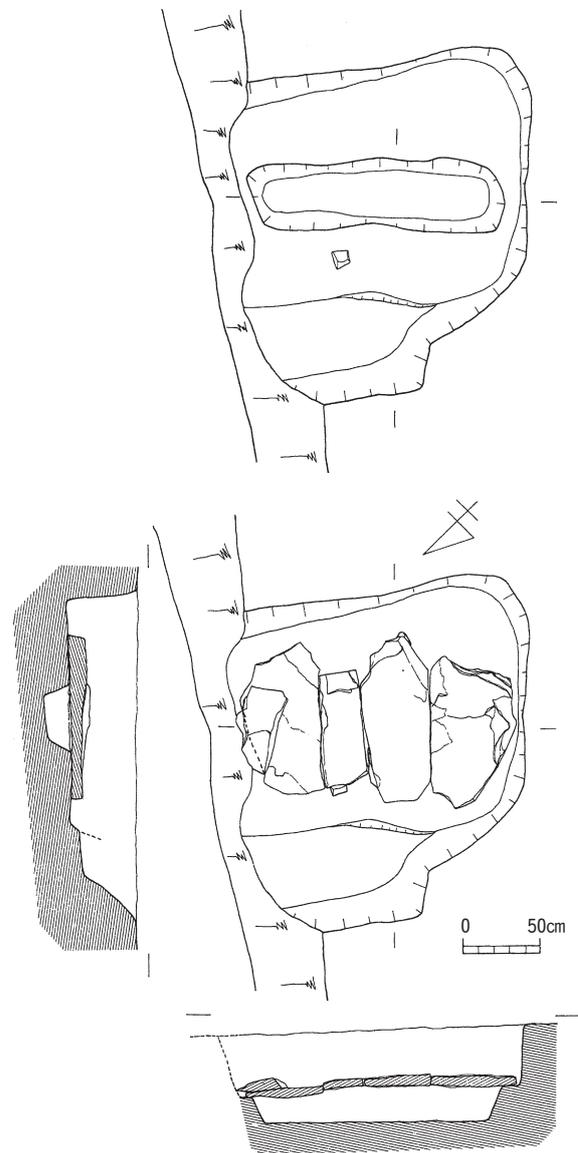
資料の所在

検出された遺構は、現地に保存されている。

参考文献

川内市教育委員会1991「御釣場古墳（2号墓）」『川内市埋蔵文化財調査報告書』1

(中島哲郎)



第3図 石蓋土壇墓実測図